論　文

エゾテリスムの終わり——バランシュとジェインズ

髙尾　謙史

La fin de l'ésotérisme : Ballanche et Jaynes

Kenji TAKAO

1. エゾテリスムという語について

1992年に刊行されたジャン＝ピエール・ロランの『19世紀フランスのキリスト教エゾテリスム』によれば、エゾテリスム(ésotérisme)という語がヨーロッパで最初に使われたのは、1828年のジャック・マテールの研究書『グノーシス主義の批評的歴史』においてであり、その後、1839年のジャック・エチエンヌ・マルコニス・ド・ネーグルの『エレウシスの祭司』というフリー・メーソン文書、そして1840年のピエール・ルルー『人類について』に使用例が見出されるという[1]。

マテールは、アレキサンドリアのグノーシス派におけるイニシエーションと秘密の教えについて述べながら、「もとより、このような試練とエゾテリスムは、中国からガリアにいたるすべての古代世界に存在していた[2]」という書き方をしている。自分でésotériqueという形容詞からésotérismeという名詞を新たにつくったと宣言して使っているわけではないので、これが最初であると断言はできないが、従来の語源辞典類[3]では1840年のルルーを最初の使用例としていることから考えても、1830年前後にエゾテリスムという名詞が使用されはじめたという説に大きな誤差はないだろう。少なくとも現時点では、1828年のマテールが最初の使用例である。

ところで、別の機会に述べたように[4]、マテールのグノーシス研究書出版の翌年、ピエール＝シモン・バランシュは『社会転生論』の第二巻として発表した『オルペウス』のなかで、エゾテリスムという語を使っている。また、バランシュがマテールの著書を読んでいたこと、『オルペウス』にマテールおよびそのグノーシス研究への言及があること、そして、ルルーの『人類について』におけるエゾテリスムという語の使われ方（ピュタゴラスはエゾテリスムであり、プラトンはエグゾテリスムである、云々[5]）が、ほとんどバランシュからの引き写しであること、したがって、マテールからバランシュへ、バランシュからルルーへというエゾテリスムの感染ルートのようなものが考えられるということもすでに指摘した。

現在、英語圏や日本ではそれほどでもないが、フランスにおいてésotérismeという語は、occultismeやhermétismeやilluminismeやthéosophieなどとの違いもはっきりしないまま、たとえば日本における「精神世界」という言葉にも似た、曖昧な使われ方が盛んにされている。そのよう

な状況のなかで、この語を学問的に扱えるようにするための試みもいくつか出てきている。

たとえば、ピエール・A・リファールは『エゾテリスム』のなかで、ある文献がエゾテリスムと見なせるかどうかを判断するために、エゾテリスムの八つの不変要素を提案している[6]。(1) 著者の没個性（固有名を冠したテクストと神話テクストの中間程度の没個性）、(2) エゾテリックとエグゾテリックの対立、(3) 微細なるもの（たとえば神智学でいうアストラル体とかエーテル体などのようなもの）、(4) アナロジーとコレスポンダンス、(5) 数、(6) オカルト・サイエンス、(7) オカルト術（錬金術、占星術、魔術など）、(8) イニシエーション。

また、アントワーヌ・フェーヴルは『18世紀のエゾテリスム』のなかで、キリスト教的であるか否かにかかわらず、次の三点を重視する思想家を「エゾテリック」な思想家と呼べるのではないかと述べている[7]。すなわち、(1) アナロジー、(2) 内なる教会、(3) 神智学。

さらに、そのフェーヴルは、約20年後の『エゾテリスム』のなかで、リファールの研究なども踏まえながら、ある思考形態をエゾテリスムと呼ぶための六つの基本要素を次のように提案している[8]。(1) コレスポンダンス、(2) 生きている自然、(3) 想像力と媒介（象徴や天使のイメージなど）、(4) 変成の体験、(5) さまざまな教義のあいだのコンコルダンス、(6) 伝達（師から弟子への）。

ここでは、バランシュの書いたものがエゾテリスムに属するかどうかを判定するのが目的ではなく、エゾテリスムと呼ばれる文献群のどこにバランシュを位置づけるかを検討するのが目的でもないので、上述の不変要素や基本要素のひとつひとつを検討することは控えるが、バランシュがフェーヴルのいう三点もしくは六基本要素をすべて備えているということだけは指摘しておこう。実際、フェーヴルはバランシュについて次のように評している。「右翼の人であると同時に社会主義ユートピアにも近いピエール＝シモン・バランシュ（1776-1847）は、いささか単独者の風があり、もう少しで大神智学者になっていた人物である[9]」。

しかし、エゾテリックなものに関するバランシュの思想の核心は、いうまでもなく不変要素とか基本要素とかには還元されない部分にある。それは、一言でいえば「エゾテリスムの終わり[10]」という発想であり、大雑把に要約すれば次のような見取図である。むかし、人間は自分で獲得したものではない知識をもち、それに従って行動していた。そして、人間社会は、その知識を保持するエゾテリックな階級と、それに従うエグゾテリックな階級とに分かれていた。これが貴族と平民の区別であり、エゾテリスムとエグゾテリスムの区別である。ところが、ある時期から、何らかの理由によって人間の精神に変化が生じ、そのような階級的な区別が消滅しはじめた。そしていまや、ひとりひとりの人間が、かつての無意識的でエゾテリックな知識を、みずからの内に意識的に取り戻すことが必要な時代になっている。

このようなバランシュのエゾテリスム概念に、意外な角度から照明をあててくれる研究がある。それは、意識の発生に関するアメリカの心理学者ジュリアン・ジェインズの仮説である。以下、バランシュとジェインズを重ね読むことによって開けてくる風景の素描を行っておきたい。

2. エゾテリスムとエグゾテリスム

バランシュはエゾテリスム（ésotérisme）という語を三回使っている。

(1) 最初は、1829年に出版された『オルペウス』の序文においてである。人類の霊的進化についての自説を、神話のオルペウスの行績をとおして語る書物の序文で、キリスト教の根元的な意味に論及する箇所である。

> イニシエーションを成就するためには、秘儀伝受者（イニシエーションを受けた者 initié）が秘儀伝授者（イニシエーションを授けた者 initiateur）を殺さねばならない、と古代の神話は伝えてきた。貴族が平民のイニシエーションを拒んだり遅らせたりすることに絶えず気を使ってきたのはそのためだ。彼ら貴族は、歴史的表現に変わりつつあったこの神話的表現が、その前ではつねにたじろがざるをえないような現実の、象徴的表現であることをよく理解していたのである。しかし、摂理はけっしてたじろがない。キリスト教は、秘儀伝授者の自発的な死によって、一般的イニシエーションを成就した。そして、神の意志の処刑を意味するその死は、すべての人間に善悪を知る能力が与えられたことの、無限の代償なのである。
>
> こうして私は、新しい秩序の境界に辿りついた。さしあたり、さらに先に進むことは差し控えねばならない。キリスト教が現れたというだけで充分である。
>
> というわけで、キリスト教と異教をほんとうに区別するものが何であるかを私は見つけた。真のキリスト教は人間性そのものであり、異教は人間性の排除である。つまり、キリスト教は人類の宗教なのである。そして、この人類という表現は、タキトゥスの時代には新しく、しかも注目すべき事柄であった。キリスト教がすべての人間の運命にもたらした単一性を、それは告げるものであったからである。
>
> いくつもの人間的本質があるということなどもはや不可能な時代、一方に貴族の宗教があり他方に平民の宗教があるということなどもはや不可能な時代、そのような時代が到来したのである。プルタルコスによれば、アレクサンドロスはアリストテレスに向かって、この哲学者が口伝えのエゾテリックな教義に属するものを公開してしまったことに不満を漏らしたという。アレクサンドロスは権力によるよりも教義によって人々を凌駕することの方により大きな価値を置いていた。アリストテレスは謝り、私の書いた書物は私の弟子にしか理解できません、と応えている。
>
> いまや、ふたつの教義が存在する必要はない。同じひとつの教義がすべての人に与えられたのである。エゾテリスム（ésotérisme）とエグゾテリスム（éxotérisme）の違いは、もはや個々の精神の違いでしかない[11]。

(2) 次に、同じ本の数ページ先で、ラテン語の ops と hostis というふたつの語を、貴族と平民に対応する対概念として捉えようと提案している箇所があり、そこでエゾテリスムが登場する。

バランシュによれば、力を意味するopsとは、大地であり、富であり、大地と一体になった人間であり、本性において所有者であり、原始の開墾者であり、絶対的かつ潜在的な意味での人間（vir）である。それに対し、hostisとは、敵であり、異邦人であり、アジールで保護すべき無力な者（inops）である。

いまや私たちはops的宗教とhostis的宗教が何であるかを知っている。それは単にエゾテリスムとエグゾテリスムの違いではない。というのも、ここで問題になっているのは、opsとinops、virとhostisの本性そのものの違いだからである[12]。

(3)　さらにもう一箇所、『オルペウス』に続いて出版される予定であったが結局は未完に終わった『贖罪都市』という作品に、エゾテリスムという語が登場する。

贖罪都市というのは、社会生活というイニシエーション・システムだけでは人間としてうまく成長できない者たちを集めて、特殊なイニシエーションを施すための、宗教的でもあり教育的でもあるような、修道院と監獄と道場と研究所を総合したような近未来施設であり、『贖罪都市』という作品は、バランシュと思しき語り手の「私」による施設訪問記のような体裁をとっている。案内役の「老人」が、訪問者の「私」を「異邦人」と呼んで、次のように説明する場面がある。

異邦人よ、私たちの行うイニシエーションは、古代の秘儀において行われていたイニシエーションとは異なっている。キリスト教はあらゆる教義、あらゆる真理の公開である。おまえは何ひとつ約束しなくてよい。沈黙の掟に縛られることはない。ここで見たり聞いたりしたことを、好きなように語るがよい。(……)

これから言うことをしっかりと聞きなさい。そこにこそ、私たちのイニシエーション、すなわち現在において唯一可能なイニシエーションの教義がある。それを私たちは公表する。なぜなら、エゾテリスムの時代は過ぎ去ったからである。キリスト教はすべての人にとって等しく存在している、主人にとっても、奴隷にとっても、家臣にとっても、君主にとっても、市民にとっても、市民権のない者にとっても、罪のない者にとっても、罪のある者にとっても、不幸せな者にとっても、幸せだと思われている者にとっても、すべての人にとって等しく存在している。だから注意深く聞きなさい。

人間は連続するイニシエーションを課せられている。人類はイニシエーションの第一段階から始めた。

あらゆる人間社会が同じように第一段階から始める。

あらゆる古代都市は、アジールとして始まった。もっとも、植民地の場合にはそのかぎりではない。というのも、植民地の場合、都市は原始的ではないからである。しかし、植民地であっても、都市がアジールのようなものとして作られるということは頻繁に起こった。

あらゆる人間の生は贖罪として始まる。生そのものが試練であり贖罪である[13]。

バランシュは自分の思想を社会転生論（palingénésie sociale）と呼んでいる。それを大雑把に要約すると、人間が、社会の習俗に無意識のうちに従って反射的に行動する状態から、その反射的行動のなかに含まれている知識を再発見して、意識的に行動する状態へと変質することを説く、一種の霊的進化論である。進化の最初の極には、蟻や蜜蜂や鳥の群にも似た、堅牢な階級制度と厳格な掟の支配する社会、本能にも似た神の知恵が習俗に内蔵され、それが人間を導いて神聖な秩序を保持しているような社会が想定されており、進化の終末の極には、個人の意識が強度を増し、魂が他の魂ともはや軋轢を起こすことのない社会（あるいは、社会の消滅）が想定されている。神話的ないい方をすれば、人間は神のような力と自由を与えられたが、その使い方を知らなかったがゆえに、教育的配慮から社会という牢獄に放りこまれた。つまり、社会は自由を拘束するための牢獄であると同時に、人間が自由の使い方を自分で学びとっていくための情報庫なのである。「人間には本能がない。人間には自由と意志がある。本能が欠如しているがゆえに、人間はすべてを学ばねばならない。こういってよければ、社会とは人間に必要不可欠な道具なのである。社会は神の啓示（révélations）の保管者であり、その、社会が保管している神の啓示を介して初めて、人間は知ることと愛することができるようになった[14]」。

そのような霊的進化の出発点として、バランシュは、人類がもともと二種類の魂に分かれていたと考える。一方は、社会に内蔵されている知識を無意識に体現している魂。他方は、そのような知識にはさしあたり与ることができず、知識をもっている者に庇護（および支配）され、少しずつ学びながらでないと生きていけない魂。このような二種類の魂が、社会階級の次元においては貴族と平民の対立となって現れ、さらに象徴的な次元においては東洋と西洋の対立となって現れる。

ヴィーコによれば、人類の歴史は神々の時代、英雄の時代、人間の時代という三段階を経るが、バランシュはこれを自分の社会転生論に援用し、「英雄」というのは、前時代の「神々」の知識の伝統を引継ぐ者たちであり、「人間」はその英雄の庇護のもとで少しずつ成長していく魂のことだと考える。どのような社会も、貴族と平民、英雄と人間の、いわば弁証法的な関係のなかで変化していく。「人類が秘儀伝受者（initiables）と秘儀伝授者（initiateurs）とに分かれているというのは、すべての宇宙開闢論に隠されているひとつの教義、すなわち失墜と回復という表裏一体の教義から導きだされる考え方である[15]」。そして、この二種類の魂に対応する教義が、エゾテリスムとエグゾテリスム、要するに秘教と顕教である。

ところが、キリスト教の到来によって、人類の歴史に根元的な変化がもたらされた。それまでは民族として、あるいは階級として、要するになんらかの集団として遂行されてきたイニシエーションが、このときから個人の営みとしてしか意味をなさなくなった。それに伴って、エゾテリスムとエグゾテリスムの区別も廃棄されたということである。それが、エゾテリスムにまつわるバランシュの基本的洞察である。

3. 英雄が神々から伝えられたこと

それでは、キリスト教到来以前の社会において、貴族が保持していた知識、エゾテリックなものであるがゆえに平民には開示されなかった知識、要するに英雄が神々から伝えられた知識とは何か。バランシュによれば、それは、人間が自然の諸力と戦って、社会を、そして文明を築きあげていくために必要なさまざまな知識である。たとえば『オルペウス』を読むとそのことがよくわかる。この、半ば神話物語のような、半ば哲学的論考のような、不思議な作品の全体の枠組は、伝説の詩人オルペウスの行績を、盲目の詩人タミュリスが調査し、その結果をアルカディア王のエウアンドロスに語るという設定になっているが、ここでのオルペウスは、社会的伝統を喪失して壊滅の危機に瀕するトラキアとサモトラケの人々に、農耕技術、卜占技術、階級制度、言語、法などを植えつける、神のような存在である。

バランシュの考えでは、「神話とは凝縮された歴史であり、いわば代数的な歴史である。伝統は原始のできごとを集め、さまざまな事実の全体から一個の象徴的事実をつくりだす。その際、長い暦を記録する労は省かれる。集められた事実は、人間精神の属性のひとつである擬人化という驚異的な能力によって、他の事実から浮き出ることがある[16]」。竪琴を奏でながら人々に詩と音楽を与えたオルペウスも、そのような神話的形象にほかならない。要するに、農耕技術、卜占技術、階級制度、言語、法などを当該の社会にもたらした、ひとつ前の時代の社会、あるいは外部の社会の、代数的に凝縮された表現だということである。

社会の創設に必要な知識の基本的な部分は、交易や戦争などの形で、その社会の外部から与えられる。「文明というものは、ある民族にとって必ず外的な手段によって、しかもときには暴力的な手段によって押しつけられるということを、いまや私たちは知っている。そして、このことは、原始の取決めや契約に関する前世紀のあらゆる学説を徹底的に打ち砕くものである[17]」。

古代社会における科学的知識について、バランシュは次のようなことを述べている。「ヴィーコが、もし電気現象を知っていたら、つまりフランクリンからアンペール氏にいたる研究によって人間精神の領域に入ってきた電気現象というものを知っていたら、そしてさらに、私たちが少しずつ理解しつつある他の種類の現象も知っていたら、もし、そのような知識に基づいて、雷に関するエトルリア人の知識（science）がどのようなものでありえたかについて評価したり推量したりできる状態にあったならば、必ずや、さらなる確信をもって自説をより遠くまで押し広げていたに違いない。エトルリアの知識が驚異的なものであったことは、いまやあらゆる点で明らかである。ヴィーコの説を、およそありそうにないというよりも、歴史的にまちがっていると考えることを、私は拒否する」。そして、次のように付け加えている。「以上に述べてきたことから考えて、知識というものは原始的である（la science est primitive）。必要に応じて、直観と啓示が補い合う。異教の民もまた、それぞれの場所と時代に応じて、それなりの摂理的器官（organes providentionnels）をもっていたのである。神はいかなる人間の運命をも偶然にまかせることはけっしてなかった。伝統こそが、さまざまな伝統の総体こそが、人類全体をひとつに結ぶ正統な絆である[18]」。

知識は原始的である。原始の知識はいわば自発的な知識（connaissance spontanée）であり、直観と啓示を通して人間に与えられた。自発性（spontanéité）と古代性（antiquité）は同義語なのである。これに対し、現在の人間は、その知識を意識的に再発見し、学び、獲得しなければならない。「自発的な知識」から「獲得された知識」への移行、それがバランシュの社会転生論のプログラムだ。

しかし、バランシュは、歴史の最初に、自発的な知識だけで成立している社会を実体的に想定したりはしない。それはあくまでも起源の彼方の理念型のようなものなのである。この点を押さえておくことはバランシュを理解するうえでとても重要である。

この件について、私たちは、自発的な文明（civilisations spontanées）と伝えられた文明（civilisations transmises）、という重要な問題を検討しなければならないのかもしれない。しかし、私の述べていることをよく理解なさっていれば、私が前者を絶対的な意味においては信じていないということを、お分かりになるであろう。

私の考えでは、地球の表面を一変した天変地異の直後、ある地域が住めるようになるやいなや、そこには人間が住みはじめた。摂理によって吹きこまれた、渡り鳥の本能にも似た本能が、人間の集団を誘い、海の水が引くにつれ、火山の噴火がおさまるにつれ、全地球上に散らばらせた。そして、『創世記』にその最初の痕跡を見出すことができる、この、無人の世界の大昔の分配（antique partage）において、それぞれの群の首長は、原始の人類の共通遺産である伝統の一部を携えていった。

次に、もうひとつ別の、巣作りにおける蜜蜂の本能にも似た本能が、いたるところで原始の都市の建設を導いた。これらの都市の形それ自体がヒエログリフのようなものであり、社会制度に関する造形的神話のようなものである。

定期的に繰り返される植民、征服、人種の混血、原始的な社会制度に生じる自発的でもあれば伝統的でもあるようなさまざまな変化、これらは次の時代に属する[19]。

また、次のようなことも述べている。ここは、言語の起源についてバランシュがどのようなことをイメージしていたかが分かる箇所でもある。

これは一度はいっておくべきであろうが、起源においては、人間の本能的能力は現在よりも大きな力と広がりをもっていた。すでに仄めかしておいたように、私たちが失ってしまった気象学的知識や、古代の天文学の発達などは、おそらくこれによって説明できる。さらに、起源の言語の形成も、たぶんこれによって説明がつくだろう。人類の知識の最初の数歩がどうしてあれほど速かったのかも、このような考え方をすれば、そしてさらに思考の記号の力というものも考え合わせれば、理解できるだろう。実際、人間が、知性をもち自由で道徳的な被造物として造物主の手から出てきたときの、言語活動（langage）の起源に近い言語（langues）、すなわち事物の起源に近い言語がどのようなものであったかについて、おおよその観念をもつこと

はできるだろうか。

いまでもまだ若干の痕跡が残っているそのような本能的能力のひとつ、獲得された光が入りこんでくることによって、つまり、本能にとってかわることを目指す科学の登場によって、いまや消滅しはじめている本能的能力のひとつ、その伝統は私たちにとってまだそれほど古いものではないのに、私たち現代人にはもはや判別することさえできない能力、そして通常の感覚を超えているために、私たちにはもはや迷信的な錯覚としか思えないような能力、それは、スコットランド人や、おそらくアルプスの一部の住民がもっている千里眼である。動物磁気の研究は、いつかは、原始の本能的能力を私たちに体験させてくれるようになるのだろうか。あるいは、少なくとも理解くらいはさせてくれるのだろうか。別のところで私はカナーン地方の国々について述べたことがある。呪縛の魔法、呪文、蛇を魅惑する魔法、それ以外の動物を魅惑する魔法、護符、物神、人間の念が宿っている物体、要するにオカルト・サイエンス（sciences occultes）のことであるが、これらは必ずしもつねにペテンであるとはかぎらない。ただ、これらのことについていま説明するのは控えておこう[20]。

言語については、次の箇所も引用しておこう。

言語とは、おそらくかつて人間がもっていた原始的能力の産物にすぎないのではないか。夢遊状態（somnambulisme）において見られるような、今の人間が意思伝達に使っている外的感覚と器官を介さずに、自分の思考を他人の思考に伝える能力、そのような原始的能力の産物にすぎないのではないか[21]。

渡り鳥の本能にも似た本能、巣作りにおける蜜蜂の本能にも似た本能、意識的に獲得したのではなく、いわば無意識に備わった羅針盤のようなものとして人間の行動を導いてきた気象学的知識や天文学的知識。これは、あるいは宇宙的なエネルギーの動きや気象的なエネルギーの流れを感じとる身体の力と考えられるかもしれない。「知識は原始的である」とバランシュがいうときに思い描いているのは、このようなものだ。農耕技術、卜占技術、階級制度、言語、法などは、このような「原始的知識」に基づいて産みだされたのである。

4. ジュリアン・ジェインズの bicameral mind 仮説

ジェインズは1920年生まれのアメリカの心理学者である。1776年生まれのフランスの思想家バランシュとの接点はなく、いわゆるエゾテリスムの領域にもさしあたり関係がない。しかし、ジェインズが『神々の沈黙[22]』で提示した二分心（bicameral mind）仮説は、バランシュのエゾテリスムあるいは社会転生論と大きく重なるところがある。

ジェインズによれば、紀元前9000年紀から紀元前2000年紀にかけての古代人は、現代人とは

異なる精神構造をしていた。古代人は私たちのような意識をもたず、そのかわりに神々の声を聞く能力をもち、その神々の命令に従って行動していた。個人的意識をもたないので、行動の良し悪しや、行為の道徳的善悪の判断に迷うこともなく、生活や戦争において生死を分けるような局面に遭遇するたびに、神々の声を耳にし、それに導かれて生きぬいてきた。ホメロスの『イーリアス』で描かれているトロイア戦争の英雄たちは、罪の意識に苦しめられたり、感情のもつれに悩んだり、自分の行動を反省したりはしない。アキレウスが、アガメムノンに愛人を奪われたとき、目のまえのアガメムノンに襲いかからなかったのは、感情を制御してぐっと我慢したからではなく、神々のひとりに髪をつかまれて引き留められたからである。他人の愛人を奪うというアガメムノンの行為に関しても、アガメムノン本人に責任はなく、すべて神々のせいとして描かれている。軍隊を導くのも、英雄たちに何をなすべきかを教えるのも、兵士たちを動かすのも、すべて神々である。決定的なふるまいをするべき局面で、人々はかならず神々や運命に操られている。「彼らは自分が何をしているのかを知らない高貴な自動人形だったのである[23]」。

では、その自動人形を操っていた神々とは何か。ジェインズの仮説によれば、それは声である。それは、たとえば15世紀のフランスでジャンヌ・ダルクが聞いた神の声や、現代の統合失調症患者に聞こえる幻聴と同じように、聞いている本人には実際に鳴り響く声として聞こえるものであるという。しかも、その声には威厳と説得力がある。

> 英雄が神に対して抱くもっとも強烈な感情は、驚嘆あるいは驚異の念であり、たとえば非常に難しい問題の解決策が不意に閃いたときに私たちが感じるような気持ち、あるいは、入浴中のアルキメデスから発せられた「ユリイカ（わかった）!」という叫びのなかに込められているような気持ちである。
>
> この神々は、今日では幻覚（hallucinations）と呼ばれているものである。たいていの場合、話しかけられている特定の英雄にしか、その姿は見えないし、その声は聞こえない。ときには、まず暗示的な視覚的オーラが現れ、つづいて霧のなかや、灰色の海や川から、あるいは空からやってくることもある。しかし、ただ現れるということもある。たいていの場合、神々自身として、しかもつねに声として現れるが、ときには、英雄と近い関係にある人物として現れることもある[24]。

古代の人間の心は、このように命令をくだす「神々」の座と、その声を聞いて命令に従う「人間」の座、というふたつの部分に分かれており、そのどちらにも意識はない。これがbicameral mindすなわち二分心の意味するところである。ジェインズはさらに、ふたつの部屋をもつ心に、脳の構造を対応させようとする。すなわち、大脳の右半球を神々の座に、左半球を人間の座に対応させるのである。そして、大脳の右半球と左半球が、場合によっては比較的独立して機能することがあるのと同様に、心の二つの部屋も、ある程度独立して働くことができるのではないかと考える。古代人の二分心とはそのような状態だったのではないか。少なくとも、右脳が聞いたものを、左脳が別

の人格からの声として理解する程度には独立していたのではないか。

この二分心の脳モデルが正しいとすると、両半球の認識機能には決定的な違いがあると予想される。すなわち、人間の側に必要な機能は左半球あるいは優位半球にあり、神々に必要な機能は右半球のほうによりはっきりと現れると考えられるのである。また、これらの機能の違いが、少なくともその残存物が、現代人の脳組織のなかにもあると考えていけない理由はない。

神々の機能は、主に、新しい状況において人を導くこと、そして行動プランをつくることである。神々は問題を測定し、そのときの状況や目的に沿って行動を練りあげる。その結果、複雑な二分心文明を産みだし、植える時期や刈りとる時期の判断とか、有用なものを選り分けることとか、ある大きな目的のためにさまざまな事柄をひとつにまとめることとか、左半球の言語的・分析的な聖域に鎮座している神経学的な人間に指示を与えることとか、てんでばらばらのいろいろな部分を一個にまとめあげるということを行ってきた。したがって、右半球に残存している機能のひとつは組織化の機能である、すなわち、ある文明のいろいろな経験を選り分けて、個々の人間に何をすればよいかを「告げる」ことができるようなひとつの形にまとめあげる機能である、といえるかもしれない。『イーリアス』や旧約聖書やその他の古い文献に登場する神々の、さまざまなお告げをよく読んでみると、このことが裏づけられる。過去と未来のさまざまなできごとが選り分けられ、分類され、ひとつの新しい絵に総合される。ときには、比喩という、あの最終的な総合の形をとることもある。したがって、このような機能が右半球の特徴であるにちがいない[25]。

この二分心が人々の行動を支配した時代、つまり、右脳の神々の声に左脳の人間が従うことで、集団あるいは社会の統制がとれていた時代は、ジェインズによれば、エジプトからペルーまで、あるいはウルからユカタンまでのさまざまな文明で、紀元前9000年紀から紀元前2000年紀にかけて、数千年のあいだ続いた。それは、強固な社会統制と安定した身分制度に基づく神政政治の時代である。ただし、この神政政治は、個人の意識を利用した、恐怖と抑圧による支配ではありえないし、法の支配でもありえない。基本的には同じ神々の声に従う人間集団の、友好的で平和な社会だったのではないかとジェインズは推測する。

ところが、紀元前2000年頃から事態が変わる。異なる言語を話し、異なる神々の声に導かれていた複数の社会が、戦争や交易によって頻繁に接触しはじめるようになり、それぞれの神々が少しずつ人間から遠のいていく。文字の使用によっても、神々の「声」が遠ざかる。さらに、火山の噴火や、他民族の侵入などの非常事態に、神々が適切な指示を出さないということがしばしば起こり、神々に対する共通の信仰が揺らぎだす。こうして、かつては社会のメンバー全員に聞こえていた神々の声が、一部の人間にしか聞こえなくなり、神々の声を代弁するような仕掛けが必要になっていく。たとえば、祭壇における神託、シビュラなどの巫女によるお告げ、憑依状態の祭司による予言、卜占、詩と音楽によって語る詩人の歌などである。詩について、ジェインズは次のように書いている。

詩は二分心の神々の言葉として始まる。その後、二分心が崩壊して予言者が残る。その一部は神託を告げる者として制度化され、未来のために決定をくだす。別の一部は詩人に特化し、過去についての神々の言葉を物語るようになる。さらにその後、二分心の力が弱まり、おそらく何らかの抑制が大脳の右半球にかかったために、詩人は訓練をしなければ神々の声が聞こえる状態を獲得できなくなってしまう。これさえも困難になると、狂乱状態、さらには忘我の憑依状態に頼るようになる。神託において生じた事態とまったく同様である。そして、紀元前1000年紀が終わろうとするころ、神託は散文的になり、意識的に韻文にしなければならなくなるが、詩も同様である。詩がムーサたちの唱和によって与えられることはなくなってしまう。意識をもった人間たちが、むかしの神々の言葉を必死で模倣すべく、書いては削り、挿入しては書きなおす、ということを行うようになる[26]。

こうして、紀元前600年ころまでには、二分心に基づいた社会が消え去り、神々の声に導かれることが狂気の沙汰に見えるような社会が出現する。

5. 意識について

ジェインズの仮説によれば、古代社会では大脳の右半球をとおして聞こえてくる神々の声が人間の行動をコントロールしていた。二分心が崩れはじめてからも、しばらくのあいだ、神託や卜占や予言などの形で、神々の指令が民衆に伝えられていた。バランシュの思弁によれば、古代社会では、貴族が前時代から引きついだ伝統と、「自発的」に授かる直観と啓示によって、平民を庇護し支配していた。神託や卜占や予言に関する見方はジェインズのそれとよく似ている。ジェインズのいう神々の知識源は、共同体の過去の経験の累積であり、それを、具体的な局面を切りぬけるために一個の解決策にまとめあげる右脳の総合力である。バランシュは当然のことながら、大脳の右半球と左半球という発想をもってはいないが、伝統的知識を管理して社会を導く貴族と、その指令に従う平民という構図はもっている。そして、貴族の保持する伝統的知識の起源をさかのぼり、鳥や蜜蜂の本能にも似た太古の人間の認識能力や、天体の動きや気象の変化を感じとる身体的な知のようなものを考えている。ただし、バランシュの基本には、人間は本能をもっていないという洞察がある。すでに引用した箇所であるが、再度引用しておこう。「人間には本能がない。人間には自由と意志がある。本能が欠如しているがゆえに、人間はすべてを学ばねばならない。こういってよければ、社会とは人間に必要不可欠な道具なのである。社会は神の啓示（révélations）の保管者であり、その、社会が保管している神の啓示を介して初めて、人間は知ることと愛することができるようになった[14]」。

この最後の引用から推測できるように、バランシュは意識の成長が社会のなかで起こること、すなわち文化のなかで起こることだと考えている。ジェインズも、個人の意識、自己の発生は文化の産物だと考えている。「人間の内部の力の感覚や、忠告を受けている感覚や、判断力喪失の感覚な

どが神々を産みだしたのだという意見に対し、私は真実はその逆だと反論したい。従わざるをえない声の存在こそ、心が意識をもつ段階に辿りつくための絶対的な前提条件なのであり、そのような段階になると、自己が責任をもつようになり、自己が自分のなかで議論をし、命令をくだし、指示を出すようになる、つまり、そのような自己の創造は文化の産物なのだ、と反論したい。ある意味で、私たちは自分自身の神になったのである[27]」。

バランシュもジェインズも、まず最初に言語を備えた人間社会があり、次にそのなかから意識を備えた個人が発生すると考えている。右半球と左半球にはっきり分かれていた二分心が崩壊していく過程で、言語から意識が発生する。貴族と平民、エゾテリスムとエグゾテリスムがはっきりと二分されていた社会が崩れていく過程で、社会から個人が発生する。バランシュの社会転生論が「エゾテリスムの終わり」に関する思想だといえるなら、意識の起源を二分心の崩壊に見るジェインズの仮説もまた、「エゾテリスムの終わり」に関する思想だといえるだろう。

バランシュは意識そのものについてはあまり多くのことを述べていない。逆に、ジェインズの関心はまさに意識あるいは意識の起源にこそあり、言語から意識が発生したというアイディアについて、興味深い仮説を提示している。それは次のような考え方だ。

言語の土台は比喩である。比喩（metaphor）とは、ある事物を指示するために、別の事物を指示する語を使うことである。それは、ふたつの事物が類似している、あるいは他の何かとの関係が類似している、という類似性の認識のうえに成り立っている。比喩によって指示される事物、説明される事物を metaphrand、比喩のために使われる語、説明のためにもちだされる語を metaphier とジェインズは呼ぶ。比喩とは、既知の metaphier によって未知の metaphrand を指示することである。そのような比喩の累積、比喩の増殖によって言語は発達する。身近で具体的な語、たとえば身体を指す語から、抽象概念を産みだすのも比喩の働きによるものであり、未知の世界を既知の言語によって少しずつ理解していくのも比喩によるものである。

ところで、すべての語にはさまざまな属性や連想などが付きまとっている。metaphier によって metaphrand を比喩するということが行われるとき、metaphier に付きまとっている属性や連想などは metaphrand に投影される。metaphier に付きまとっている属性や連想を paraphier、それが metaphrand に投影されたものを paraphrand とジェインズは呼ぶ。たとえば、「雪が毛布のように大地を覆う」という比喩の場合、雪が大地を覆っているようすが metaphrand、ベッドを覆っている毛布が metaphier、そして、目覚めのときが来るまでのぬくもり、守られている感じ、心地よい微睡みなどが paraphier であり、春の目覚めまで雪に守られて心地よく微睡んでいる大地のようすなどが paraphrand ということになる[28]。新しい比喩における paraphrand のひとつひとつが、それぞれ独立した metaphrand となり、さらにそれが、また別の新たな metaphrand をもつ新たな metaphier になって新たな比喩がつくりだされる。このように、metaphier、paraphier、metaphrand、paraphrand の四項の相互作用によって語彙が豊富になり、世界の認識が広がっていく。つまり、比喩の四項構造が作動することによって言語は発達し、知識は増えると考えることができ

るのである。

意識もこのような比喩の四項構造によって成立している。すなわち、何かを「意識する」ということは、肉眼で具体的に何かを「見る」という比喩によって産みだされたものである。metaphrand が「意識する」、metaphier が「見る」、paraphier は「見る」にまつわるすべて、すなわち「目」や「対象」や「空間」などである。これだけで意識の発生を説明できるわけではないが、比喩の網目がここまで発達していなければ、意識は存在しはじめない、というのがジェインズの考えである。少なくとも、意識を意識するとき、私たちはこのような比喩に頼らざるをえない。

比喩が熟成し、二分心が崩壊しはじめたとき、意識が発生した——ジェインズはそう考えている。

ジェインズは社会と個人の問題についてはほとんど何も述べていない。逆に、バランシュはまさに社会と個人の関係が大いに問題となった時代の思想家であり、個としての人間について、人間の個体性について多くのことを述べている。

さきに、バランシュの社会転生論を霊的進化論と呼んで次のように述べた。「進化の最初の極には、蟻や蜜蜂や鳥の群にも似た、堅牢な階級制度と厳格な掟の支配する社会、本能にも似た神の知恵が習俗に内蔵され、それが人間を導いて神聖な秩序を保持しているような社会が想定されており、進化の終末の極には、個人の意識が強度を増し、魂が他の魂ともはや軋轢を起こすことのない社会（あるいは、社会の消滅）が想定されている」。バランシュは、原始の社会において人間と人間を結合している原理を連帯（solidarité）と呼び、終末の社会（あるいは社会の消滅）において人間と人間を結合する原理を愛（charité）と呼ぶ。したがって、「すべての問題は連帯から愛への段階的変容ということにある[29]」。

バランシュにとって、意識の問題はもちろん認識の問題でもあるが、それ以上に倫理の問題であり、個人の責任能力の問題である。ジェインズの言葉を借りれば、二分心の時代には、人間の行為の責任は神々にあったが、二分心崩壊後は「自己が責任をもつようになり、自己が自分のなかで議論をし、命令をくだし、指示を出すようになる」。同じようなことをバランシュは次のように表現している。「社会は試練および支えとして人間に与えられた。その歩みの一歩ごとに私たちは堕落と回復の教義に出会う。社会の必然的帰結である連帯も、試練であると同時に支えとして人間に与えられた。というのも、無限の叡知の寛大な目から見れば、罰と庇護は同じものだからである。人間が自己を完成し、自己を改善するにつれ、いいかえると、人間が発達するにつれ、連帯の強度は減少し、人間は個体性（individualité）に近づく[30]」。

しかし、ここでバランシュのいう個体性、すなわち「個であること」は、肉体の誕生と死にはさまれた、いわゆる現世の時間を超えている。いま引用した箇所には、「しかし、人間は来世においてしか個体性に達することができない」という文が添えられているのである。そして、さきに引用した「すべての問題は連帯から愛への段階的変容ということにある」の直前部分には、次のようなことが書かれているのである。

個体性は進歩である。ド・メストル氏が考えている厳格な連帯は、道徳的自我（moi moral）を消滅させてしまう汎神論のようなものだ。人間のなかで道徳感情が発達するにつれ、道徳的自我が強度を増し、現実のものとなっていかねばならない。しかしながら、社会の基盤となっている道徳的な一体性、人類のアイデンティティである一体性を、この個体性が破壊するようになる、などと心配するにはおよばない。いまや私たちは社会的絆の崩壊の危機に瀕しているといって悲しむ人々を、私はいつか慰めたいと考えている。また、そのような絆がどのように存続しつづけるかを、いつか説明したいと思っている。神は人間社会をつねに見守りつづけてくださったし、終わりまで見守りつづけてくださることだろう。

したがって、ここでは単純な事実を一点だけ述べるにとどめたい。個体性が趨勢であること、したがって個体性が進歩であること、それは認めざるをえない。来世においては個体性はより完全なものになるだろう。現世においては個体性はまだまだ数多くの暗礁を避けられない。個体性がこのように不完全であるからこそ、さまざまな不都合が発生し、悪が生じているのである[30]。

また、次のような書き方もしている。

現世を出たあとすぐに最終的状態に入るわけではないということを認めておけば充分である。すべての被造物はそれぞれ自分の終わりに到達しなければならない。人間の運命にしても、成就すべきこと、すなわち成し遂げるべき進歩がまだ残っているかぎり、まだ何も終わっていない。創造主のすべての作品にとってと同じように、人間にとっても、成就とは完成のことである。それは、はじめに神がみずからの作品をよしとしたからであり、事実すべてのものには、それぞれの発展の原因と手段が内蔵されているからである。ただ、人間の場合には、自由であるがゆえに、自分で完成に辿りつかねばならない。というのも、繰り返すが、知性はその名に値するものに自分でならなければならないからである。それゆえに、現世ですべてが終わるということなどありえないし、現世のすぐあとに、人間が自己の完成をめざし、そしてそこに辿りつくまで昇りつづけていけるような、もうひとつの自由な状態が存在しないわけがないのである。他方、個人の運命がもはや他の個人の運命から影響されることもなく、他の個人と軋轢を起こすこともなくなるときが、いつかやってくるにちがいない。それは自立と個体性のときである[31]。

6. エゾテリスムの問題圏

最初に述べたように、エゾテリスムと呼ばれる思想を学問として扱おうとする試みはあるものの、一般的にこの語の使われ方はいまだに曖昧であり、対象領域は茫漠としている。他方、バランシュのエゾテリスムの考え方は、必ずしも語を厳密に定義したうえで展開されているわけではないが、

かなり限定的であり、エゾテリスムを考えるうえでそれなりに有効な方向性を示しているように思われる。

そのバランシュの議論に、心理学者ジェインズの仮説を重ね合わせると、ある程度限定されたエゾテリスムの問題圏が浮かびあがってくる。とりあえずのまとめとして、それを以下に列挙しておこう。

(1) エゾテリスムは、人間は意識をもつようになる以前から多くの知識をもっている、気づいたときにはすでに多くのことを知っている、という認識を前提にしている。

(2) その知識は、ジェインズの言い方によれば「神々の声」ということになるが、少なくとも当事者の人間には、人間を超えた存在、あるいは人間を超えた世界から与えられたものとして捉えられている。

(3) そのような知識の源に関して、ジェインズは、共同体の過去の経験の累積を右脳の総合力がまとめあげた知恵であると考える。バランシュは、究極的には、鳥や蜜蜂の本能にも似た太古の人間の認識能力や、天体の動きや気象の変化を感じとる身体的な知のようなものを想定している。

(4) バランシュは、原始の知識の痕跡が、さまざまな神話や宗教的教義や象徴体系などに残されていると考える。一般にエゾテリックな知識ということが云々される場合、そのような象徴体系を、解読すべき暗号と捉えることが多い。

(5) ジェインズは、意識は言語によって産みだされたものであり、言語の土台は比喩であると考える。もしその仮説が正しいとすれば、原始の知識も比喩によって成立していることになるから、比喩の生成の構造（たとえば metaphier、metaphrand、paraphier、paraphrand から成る四項構造）によって、象徴体系を解読する可能性が開けてくるかもしれない。

(6) エゾテリスムとエグゾテリスムの区別が消滅し、エゾテリスムという概念そのものが無効になるときは、意識の発生あるいは意識の拡大が問題になるときでもあり、したがって、意識が個人の意識でしかありえない以上、それは個としての人間が問題になり、さらに個としての人間の責任が問題になるときでもある。それは、バランシュの思想に沿って考えれば、さらに個としての魂の転生の問題にもつながり、さらに社会の消滅の問題（「個人の運命がもはや他の個人の運命から影響されることもなく、他の個人と軋轢を起こすこともなくなるとき」）にも通じている。

註

1. Jean-Pierre Laurant, *L'Ésotérisme chrétien en France au XIXe siècle*, Lausanne, L'Âge d'Homme, 1992, p.19.
2. Jacques Matter, *L'Histoire critique du gnosticisme*, Paris, Levrault, 1828, t. II, p. 83.
3. たとえば *Dictionnaire historique de la langue française*, sous la direction d'Alain Rey, Paris, Robert, 1992. の « ésotérique » の項。
4. Kenji Takao, « Ésotérisme et somnambulisme chez Ballanche » in *Bulletin of Daito Bunka University*, 2004, vol. XLII.
5. Pierre Leroux, *De l'humanité*, Paris, Perrotin, 1840, pp. 397-398 (Nouvelle éd., Paris, Fayard, 1985, p. 289).

6. Pierre A. Riffard, *L'Ésotérisme*, Paris, Robert Laffont, 1990, pp. 307-364.
7. Antoine Faivre, *L'Ésotérisme au XVIIIe siècle*, Paris, Seghers, 1973, p. 7.
8. Antoine Faivre, *L'Ésotérisme*, « que sais-je », Paris, Presses Universitaires de France, 1992, pp. 13-21. 邦訳、『エゾテリスム思想——西洋隠秘学の系譜』田中義廣訳、白水社、1995. pp. 16-25。
9. Antoine Faivre, *L'Ésotérisme*, p. 82.（邦訳、p. 98.）
10. 「エゾテリスムの終わり」というのは、20 世紀フランスの思想家レーモン・アベリオの書名でもある。Raymond Abellio, *La fin de l'ésotérisme*, Paris, Flammarion, 1973. アベリオがバランシュに直接言及した箇所は見つからないが、ファーブル・ドリヴェやヴロンスキーなど、バランシュの同時代人で、しかもバランシュと思想的に縁の深い著述家から、アベリオは少なからぬ影響を受けている。
11. Ballanche, *Orphée*, Paris, Jules Didot ainé, 1829, « Préface », pp. 45-46. なお、1830 年版全集および 1833 年版全集にも同じテキストが採録されている。*Œuvres de M. Ballanche*, Paris, Bureau de l'encyclopédie des connaissances utiles, 1833, t. V, pp. 60-61.
12. *Orphée*, in *Œuvres*, *op. cit.* t. V, pp. 73-74.
13. *La Ville des expiations*, édition préparée sous la direction de J. R. Derré, Lyon, Presses Universitaires de Lyon, 1981, pp..109-117.
14. *Essai sur les institutions sociales*, in *Œuvres*, *op. cit.* t. II, p. 278.
15. *Orphée*, *Œuvres*, *op. cit.* t. V, p. 10.
16. *Orphée*, *Œuvres*, *op. cit.* t. V, pp. 4-5.
17. *Palingénésie sociale : Prolégomènes*, in *Œuvres*, *op. cit.* t. IV, p. 116.
18. *Palingénésie sociale : Prolégomènes*, in *Œuvres*, *op. cit.* t. IV, pp. 379-380.
19. *Palingénésie sociale : Prolégomènes*, in *Œuvres*, *op. cit.* t. IV, pp. 116-118.
20. *La Ville des expiations*, pp. 29-30.
21. *Palingénésie sociale : Prolégomènes*, in *Œuvres*, *op. cit.* t. IV, p. 358.
22. Julian Jaynes, *The Origin of Consciousness in the Breakdown of the Bicameral Mind*, Boston, Houghton Mifflin, 1976, 2e éd. 1990. 邦訳、『神々の沈黙』柴田裕之訳、紀伊國屋書店、2005。邦訳は大いに参考にしたが、引用には使用しなかった。
23. *The Origin of Consciousness*, 2e éd. p. 75.（邦訳 p. 99.）
24. *The Origin of Consciousness*, p. 74.（邦訳 pp. 98-99.）
25. *The Origin of Consciousness*, pp. 117-118.（邦訳 p. 147.）
26. *The Origin of Consciousness*, pp. 374-375.（邦訳 pp. 453-454.）詩に関するこの箇所の最後で、ジェインズはタミュリスに言及している。タミュリスは『イーリアス』に登場する伝説的な音楽家であり、歌と竪琴に秀でた詩人であるが、嫉妬ぶかい音楽の女神ムーサたちと技を競って敗れ、視力と音楽の力を失ってしまう。ジェインズはこう書いている。

    もちろん、タミュリスが実在したかどうかさえわからないし、この話が何をいおうとしているのかも正確にはわからない。しかし、この話は『イーリアス』に後から付加された部分のひとつだと私は思う。そして、後から挿入されたということ自体が、二分心の崩壊に伴って、芸術表現における脳の両半球の協働に困難が生じたことを示しているのではないかと考える。タミュリスの話は、私たちがインスピレーションを受けるときに意識を失い、その後、意識を失っていたことに気づくとインスピレーションを失ってしまう、という感覚を物語っているのかもしれない。意識は神々を模倣して、嫉妬ぶかい意識となり、他の何物にも行動の指導権を渡さなくなる（p.377. 邦訳 p.457）。

    他方、バランシュのタミュリスはオルペウスの行績を調査して語る者である。オルペウスとタミュリスはともに歌と竪琴に秀でた詩人であり、どこかパラレルな存在であるが、バランシュにおいては、オルペウスが人間に知識を与える神々の役割を果たしているのに対し、タミュリスは貴族と平民の区別、エゾテリスムとエグゾテリスムの区別が崩壊する危機の時代に身を置いて、終わりゆく時代の伝統と知識を、始まりつつある新しい時代のために語りつぐ役割を果たしている。
27. *The Origin of Consciousness*, p. 79.（邦訳 p. 104.）
28. *The Origin of Consciousness*, p. 57.（邦訳 p. 75.）
29. *La Ville des expiations*, p. 32.
30. *La Ville des expiations*, pp. 31-32.
31. *Palingénésie sociale : Prolégomènes*, *in Œuvres*, *op. cit.* t. IV, pp. 130-131.